研究ノート：荒木貞夫と「国家の興隆と博物館の重要使命」について

後々田寿徳

はじめに

本稿は、荒木貞夫（一八七七～一九六六）と、彼が一九四〇（昭和十五）年に日本博物館協会（以下、日博協とする）会長として行ったラジオ講演とされる、「国家の興隆と博物館の重要使命（原稿）」について検討するものである。

まず最初に荒木および日博協の概略を述べる。

荒木は大正、昭和期の軍人、政治家である。東京に生まれ、陸軍士官学校を卒業後、陸軍大学校に在学中一九〇四（明治三七）年に日露戦争に出征した。日露戦争後は参謀本部員としてロシアに駐在、ロシア公使官付武官補佐官、陸軍大学校教官などを歴任。一九一五～一九一八（大正四～七）年には第一次世界大戦にロシア軍人として従軍。歩兵第二三連隊長、憲兵司令官、参謀本部作戦部長を経て一九二七（昭和二）年には陸軍中将となる。

さらに一九三一～一九三四（昭和六～九）年まで、犬養・斉藤内閣の陸軍大臣をつとめ、大将へと進み、陸軍の頂点にまで登りつめた。当時荒木は皇道主義の精神論者で知られ、宇垣一成、真崎甚三郎などとともに「皇道派」と呼ばれる軍閥の中心的存在であったが、二・二六事件の責任問題によって一九三六（昭和十一）年予備役に編入され、軍の第一線から身を引いた。一九三七（昭和十二）年に内閣参議、翌年五月より翌々年八月まで第一次近衛・平沼内閣の文部大臣、同年十二月より一九四〇（昭和十五）年七月ころまで内閣参議をつとめた。

第二次世界大戦後、極東軍事裁判においてA級戦犯として有罪判決（終身刑）を受け服役したが、一九五四（昭和二九）年仮釈放となった。奈良県に講演旅行中八九歳で病没した。[1]

日博協は、一九二八（昭和三）年の昭和天皇即位を記念し各界の有志により設立された「博物館事業促進会」を母体とする。博物館の普及、事業推進をその主目的とし日本の博物館界を代表する団体として、文部省と密接な関係を持った。一九三一（昭和六）年には「日本博物館協会」に名称を変更し、一九四〇（昭和十）年、社団法人となる。促進会設立年より機関誌『博物館研究』や報告書の刊行、各種大会、研究会、講習会などを実施し、戦前期における唯一の全国組織の団体として活動した。戦後も会は継続され、一九八六（昭和六一）年に財団法人化し、現在も日本最大の博物館関係団体である。[2]

荒木は、日博協の第五代会長を、一九四〇（昭和十五）年七月ころより第二次世界大戦直後ころまで約五年間つとめている。日博協会長就任後、荒木が行った最初の対外的な公務と思われるのが、本稿で取り上げるラジオ講演、「国家の興隆と博物館の重要使命」であった。

一・日博協会長就任前の荒木

荒木の日博協会長就任の経緯については不明である。

一九四〇（昭和十五）年三月に没した前会長正木直彦の後任をさがしていた日博協理事長山脇春樹が、日博協顧問であった荒木に就任を依頼したとの記事が就任当時の『博物館研究』にみえるが、[3]荒木が日博協顧問であったという記録は、会長就任前の同誌にはみあたらない。

荒木は日博協会長就任前より、個人的に博物館について関心が深かったという説が、その自伝や伝記などにたびたび記されている。荒木が博物館に関心を

持ったのは、大正期のロシアを中心としたヨーロッパ訪問滞在の経験が遠因だという。[4]

荒木はロシア公使官付武官補佐官時代に、何度かヨーロッパ旅行を行ったらしいが、一九一三（大正二）年スイス・ベルンの平和博物館を訪れ、その内容に感心したという。[5] 後年荒木は次のように回想している。

「私は曾て瑞西のベルン平和博物館を視察した。平和のためには戦争の原因と惨禍を知悉するの要があるとし、過去の各種大戦特に奈翁第一世戦及一九七〇［ママ］年の独仏戦争の資料を豊富に展示し、その要図は相当の尺度で統計と共に見易き図表としてあった。私が曾て陸軍大学で戦史研究に従事した時、此の図表あらば幾許か時間の節約と又印象を深くすることが出来たかと思った。又実務を取るに当っても必要あらば好む時に博物館を訪ぬれば万事足りると思った。更に学習の時許りでなく、社会へ出ても絶えず研究の便を得るのみか幾度か繰り返し閲覧する間に図表に慣れて記憶も深刻となり、且つ一事の探索にも時間の節約ができると痛切に感じて羨ましくなった。そして此資料が平和戦争のみならず、其の調査する角度によりて多角的研究の資料となることを知得し得た。之を拡充して一切の教育特に智識の修得には博物館の整備運用が必要であることを痛切に感得した[6]」

荒木のまとまった伝記としては、最も成立が早い『秘録陸軍裏面史：将軍荒木の七十年　上巻（一九五四）』は、このベルンの博物館訪問について触れ、「将軍は常に単なる机上のものより実物教育を重視し、暗記よりもその応用を尊重し、このため博物館論者であることも有名であるが、恐らくはこの時ベルンの博物館を見学したこともその原因の一部となったのではなかろうか……」としている。[7]

いずれも回想記であり、他の史料の裏付けはない。さらに会長就任前の昭和初頭に、博物館建設を企図したという荒木の回想もあるが、あいまいな点が多い。[8] これについては後考を俟つ。

また、就任前年までの文相時代の荒木が、博物館事業について深い関心を持っていたという説もある。

当時文部省直轄の唯一の博物館であった東京科学博物館について、『国立科学博物館百年史（一九七七）』には次の記述がある。

「昭和十四年五月ノモンハン国境で、外蒙軍と武力衝突し、彼我の火器の差の前に苦杯を喫した陸軍部は科学振興の重要性を再認識し、科学動員に一段と圧力を加えるようになった。博物館事業に深い関心を持っていた当時の文部大臣陸軍大将荒木貞夫は、科学研究の重要性を認め、国力の拡充は科学的基礎の上にその確立を図らなければ完璧を期しがたいとして、それまで社会教育機関の一つであった本館を、学術研究体制の一環に組み込もうとして、昭和十四年八月十五日東京大学教授坪井誠太郎を本館々長に兼任発令した。坪井の博物館像は彼が昭和八年雑誌〈科学〉に発表した論文でよく知ることができる。―中略―坪井が館長就任を受諾したのは、上記の考えに従って、既存の本館に学術博物館としての機能を付与するため、即ち本館の性格を改造しようとしたからだといわれている[9]」

文相時代の荒木の政策のうち、有名なものに科学振興政策がある。荒木は一九三八（昭和十三）年八月、文相の諮問機関として科学者を中心とした「科学振興調査会」を設置した。[10] 荒木の「科学振興ニ関スル具体的方策如何」という諮問に調査会は計三回の答申を行っている。その第三回の答申には「科学ニ関スル博物館ヲ整備拡充スルト共ニソノ活用ニ付遺憾ナキヲ期スルコト」以下として、おもに科学博物館一般の振興に関する具体案がたしかに提示されている。[11]

しかし、この答申は一九四一（昭和十六）年三月二八日に行われたものであり、当時すでに荒木は日博協会長であった。文相辞任後、荒木が科学振興調査会にどの程度関与していたかは不明であるが、何らかの影響を与えていたにせよ、第二回の答申ですら荒木が日博協会長就任後の一九四〇（昭和十五）年八月十九日に行われていることを考えると、この第三回答申は文相時代、すなわち日博協会長就任前の、荒木の博物館に関する特別の関心を表すものだとは即断できない。

また、荒木の文相就任直前の一九三八（昭和十三）年四月に、文部省に紀元二千六百（一九四〇）年を記念した「国史館」と称する歴史系博物館の設立計画などの準備事務が委嘱されており、翌年三月省内に「国史館造営委員会」が設置されている。[12] この国史館問題はそれ以前に議会などでも論議されており、

荒木が当時「博物館事業に深い関心を持っていた」のであれば、その設立に向け何らかの積極的関与、言及がありそうなものであるが、荒木の回想、伝記などに国史館についての記述はみあたらない。

よって日博協会長就任前（文相時代およびそれ以前）の荒木が、博物館事業について「深い」関心を持っていたとする説には疑問がある。

それでは荒木は日博協会長就任時には博物館について関心がほとんどなく、官職を退いた後数多く引き受けていたとされる「名誉職」の一つとして、請われるまま日博協会長に就任し、その職をつとめるつもりであったのか。

以下、日博協会長としての初仕事といえる「国家の興隆と博物館の重要使命」を検討する。

二、「国家の興隆と博物館の重要使命」

前述したとおり、「国家の興隆と博物館の重要使命」は、荒木が一九四〇（昭和十五）年九月十八日に、日本放送協会東京中央放送局より、約二十分間にわたりラジオ講演したものとされる。[13] 同年七月二五日に行われた日博協の理事会に荒木も出席しているが、その議題に「博物館に関するラヂオ放送の件」とあり、[14] このころすでに講演が計画されていたことが知れる。本講演の原稿が、『博物館研究（同年十月号）』に掲載されており、[15] 同稿は別に小冊子として印刷製本され、関係機関などに配付されたらしい。[16]

荒木の所蔵していた文書は、現在おもに国立国会図書館憲政資料室・東京大学法学部附属近代法政史料センター原資料部・東京大学法学部研究室・スタンフォード大学フーヴァー研究所図書館の四機関に分散して保存されているという。[17] これらのうち、現時点において目録などで資料の概要を知りえたのは前二者であり、国立国会図書館憲政資料室が「国家の興隆と博物館の重要使命」に関する次の三点の史料を所蔵していた。

一、「時局と博物館」　ザラ紙に手書謄写版刷・糸綴　十六頁　二七・〇×十九・五㎝　ペン（黒インク）による校正／ペン（青黒インク）による荒木自筆書込有（荒木貞夫文書第六六五＜文書目録題名は「国家の興隆と博物館の重要使命」＞・図版一～四）

二、「国家の興隆と博物館の重要使命」　便箋に荒木自筆墨書　三十頁（欠頁・五、十一～十四、十六～二四）　二六・五×十九・二㎝　毛筆による荒木自筆書込有（荒木貞夫文書第六六四・図版五～七）

三、「国家の興隆と博物館の重要使命」　上質紙にタイプ印刷・簡易製本　十四頁　二〇・〇×十〇・〇㎝（荒木貞夫文書第六六四）

これら三点の史料は、内容からみて「国家の興隆と博物館の重要使命」のそれぞれ第一稿、第二稿、最終稿であると思われる（この第一稿、第二稿は、厳密な意味で初稿、初稿の次稿ではないであろうが、ここではその成立順序をさす）。最終稿（史料三）は『博物館研究』稿とほぼ同一内容であり、前述した小冊子そのものであろう。[18]

まず注意したいのは、第一稿（史料一）は荒木の手になるものではないと思われる点である。図版にみるとおり、第一稿はていねいな楷書による謄写版刷である。自身のための講演原稿の、いわば草稿の草稿である第一稿を、自ら楷書で浄書し謄写版刷するとは考えられない。

荒木文書の他の講演原稿、特に陸軍大臣時代の原稿にはこのような手書謄写版刷の原稿が散見され、そのほとんどは部下、官僚らによる講演原稿「案」と思われる。[19] 当時政治家などの講演原稿案は、稟議などの都合上、このような形式で作成されることが多かったのであろう。よって第一稿の作成者すなわち「国家の興隆と博物館の重要使命」の原案者は、荒木とは別人が想定される。

また、荒木によって修正・加筆された第一稿と、荒木自筆による第二稿の間にも大きな差異があり、さらに荒木によって校正された第二稿と、最終稿にも少なからぬ差異が認められる。その間にもいくつかの草稿が存在したのであろうか。

以下、第一稿の原文（謄写版刷を原案者がペン＜黒インク＞で校正した段階と思われる）と、最終稿（『博物館研究』稿）を別表により比較する。文意によって対応すると考えられる段落を上下に併置した。備考欄にはそれぞれのおもな差異と思われる部分を抽出した。なお、適時改行を行い、旧漢字・旧仮名遣いは改めたところが多い。

第一稿（史料一）	最終稿（『博物館研究』稿）	備考
時局と博物館 日本博物館協会長　荒木貞夫 我が邦の学芸教育施設中博物館のように閉却され社会の進歩から取残されて居たものは恐らく他に比類がないと思います。故に私はこの博物館問題に就て、聊か所懐の一端を申述べたいと思います。	国家の興隆と博物館の重要使命 日本博物館協会長 陸軍大将　男爵　荒木貞夫 国家興隆の源泉が第一に国民精神の昂揚にあることは論なき処であります。同時に此昂揚せる精神により各般の理想を実際に具体化し得べき実力の培養も肝要であることは忘るることは出来ません。我国が旺盛なる精神を以て明治維新の大業を補翼し奉り復古の輝かしき発展を為したるに拘らず一挙に其理想を実現することが出来ずに涙を呑んで暫らく雌伏せざるを得ないことになったのは実に其実力の足らざるを自覚したからであります。而して其の最も微力なりと感じたものは科学工業の力でありました。爾来七十年間此事に就いて畢生の努力を為しつつも今尚此の力の十分ならざる歎がありますのは抑も何処に其欠陥があるものでありましょう、夫れは熟ら考うるに教育が唯学校内に止まり実際の力の培養の根源である社会教育の設備も、工夫も将又関心も足らざりしことを指摘せらるるのであります。即ち幼少の時より大衆的に又自然的に其素養を与える機関特に其重要性を有つ博物館の施設に於て不完全なるものがあったからであります。今や世界の新興国家が其の興隆を目指して新秩序の建設に進むと共に非常な熱を以て此最も有効実際的な施設に力を尽くし斯種施設の優劣こそ一国興隆の鍵であるというて居るのも故なきではありません。アノ一時斯様なものを疎にした蘇連邦すら最近此点に多大の関心を放つに至ったことは注目に値します。 抑も一国の興隆は其興隆に必要なる諸要素が国内に充実する様に一国内の雰囲気を作らねばならぬと思います。之が為には子供の時から始まって一角の専門家に至るまで常に其研究の必要なる部面に随時随所に接触を保ち得る様にすることが肝要であります。此見地よりして博物館の存在が非常なる意義を有ち又重大な役割を演ずるのでありまして此振否は実に一国興隆の計量器となるのであります。今日独逸興隆の蹟を見ましても実に思い半ばに過ぐるものがあるのであります。然るに我国の博物館を見まするに頗る閉却されて居るのであります。これでは到底国家興隆に如何に懸命になっても其熱の大なる割合に其効果を期待することは困難と存じます。今日の世相は唯余りに目ま苦しき現実の変化に焦慮して却て其基礎の建設を閉却し思わざる国家の進運を疎外して居る恐れがあるのであります。 急がば廻れの諺の如く国家興隆の基礎は迂遠に似て第一が教育にあることは既に周知のことであります。同様に教育も亦社会的大衆教育機関の設備が遠道の様でこれが最も近道であることを知らねばなりません。私共は同憂の士と共に昭和の初より此点に微力を致し博物館特に科学大殿堂の建設を叫び来ったのでありますが、早くも十五年は空しく過ぎ唯不急の事業なりとせられて一日一日を空しく経過し今日此事態に直面致しましたことは返す返すも遺憾に思うのであります。	其の最も微力なりと感じたものは科学工業の力 教育が唯学校内に止まり実際の力の培養の根源である社会教育の設備も、工夫も将又関心も足らざりしこと 幼少の時より大衆的に又自然的に其素養を与える機関特に其重要性を有つ博物館の施設に於て不完全なるものがあった 子供の時から始まって一角の専門家に至るまで常に其研究の必要なる部面に随時随所に接触を保ち得る様にすることが肝要

第一稿（史料一）	最終稿（『博物館研究』稿）	備考
博物館は歴史、美術、科学等に関する各般の資料を蒐集展観して学芸の研究並に一般民衆の教育に資することを以てその本来の使命と致すものでありますが、之と同様に学校教育の補助機関としても亦重要なる役目を果すものであります。然るに、我が邦に於ては、斯の如き博物館の重大使命が未だ一般によく理解されず博物館を以て単に骨董品の倉庫の如く考えられ之が施設を以て不急第二次的の事業と解せられて居るのは寔に遺憾のことと申せねばなりません。	以下少しく内外博物館の情況を述べて諸君の奮起を願いたいと思います。博物館は元来政治経済軍事文化其他各般一切の資料を蒐集観覧に供し之を基礎として一般の教育並に研究に資し一方一国文化の誇るべきものを永遠に保存し其発達を助け国民知徳の向上と其自尊心研究心を与うる使命を有するものでありまして、社会教育上の特殊機関として学校教育の及ぶ能わざる所を補う重要なる任務を負うものであります。加之完備せる博物館は夫れ夫れの部門に応じて子供の時からの親しみを與え所謂三ツ子の心百マデの譬の如く此親しみが第二の天性となり成長して自然に偉大なる人物を出すに與って力あるものであります。故に完全優良なる博物館を有せざる国家こそ実に不知不識の間に非常なる損失をして居るものと申さねばなりません。然るに我国に於いては博物館を以て単に骨董品の倉庫の如く考えて居るのは寔に遺憾のことでありまして我国科学工業の進展が遅れ勝ちであり、亦綜合的一般観察能力が割合に不足なのも亦之が原因の一つであるのであります。斯くは申しますものの此の如く世人の関心の薄きも実は我国今日までの博物館の多くは甚だ貧弱幼稚であって稍もすれば唯座して観覧者を俟つという外何等の活動もなく所謂死んだ博物館とでも申すべきものが多いということが其罪の一つではありますまいか。其様なことでありますから我々は今後に於て血の通った息をしている生きた活動的の博物館設立に努力しその振興を図らんと致して居るのであります。	政治経済軍事文化其他 社会教育上の特殊機関 博物館は夫れ夫れの部門に応じて子供の時からの親しみを與え所謂三ツ子の心百マデの譬の如く此親しみが第二の天性となり成長して自然に偉大なる人物を出すに與って力あるもの
我が邦の人が博物館に対して斯の如く認識不足の原因の一つは実は我が邦には真によくその使命を果して居るような完備した新式の博物館が甚だ少く、現在の博物館の多くが極めて貧弱幼稚で無為無能振りを国民の前に見せ付けて居るからであります。之は本邦の博物館が悪いので決して博物館そのものの罪ではないのであります。 博物館の概念は昔と今とでは大に相違致して参りまして、昔の博物館やまた現在の旧式幼稚な博物館に於ては唯物品を陳列保管し座して観覧者の見に来るを待つと云う外何等の活動をなさぬので、斯様な博物館は所謂死んだ博物館とでも申すべきもので、私が日本に望むものは決して斯かる博物館ではなく活きて積極的に活動する博物館であります。 近代の進歩した博物館に於きましては凡て観覧者に積極的な働きかけ、学問の素養があり教育上の経験のある説明指導員を置いて現場説明を行うは勿論、観覧者を講堂或は教室に入れ映画等を利用して基礎的な解説を行うのであります。又学生やその他の団体に対しては予て準備したプログラムにより陳列品に関連した学術の通俗講演を行うこともあります。また何か特別の研究目標を持って来館する者に対しては専門の学芸員があって夫々適当な指導を与え研究を扶けるのであります。その外博物館は特に貸出の目的で陳列資料を準備して居てこれを各地の展覧会、学校その他へ貸出したり、また博物館以外の場所に志望者を引率して現地指導を行う等博物館の積極的活動は多方面に渉り民衆大学、民衆研究所或は目に訴える学校以上の学校とも見做すべきもので、その職能の偉大なことは到底他の学芸教育機関のよく及ぶ処ではないと深く信ずるものであります。	凡そ我々の希望する近代の進歩した博物館としては博物館の方から凡て観覧者に積極的に働きかけ学問の素養もあり教育上の経験もある説明指導員を置いて観覧者の素養に応じ、実物に付説明を行うは勿論、必要に応じては講堂或は教室に招致し此処で先ず映画等を利用して基礎的に解説を行い次で実物に就て理解体験を為さしむる様にし又学生や其他の団体の希望によりては予て準備せるプログラムにより陳列品に関連して通俗又は専門的講演を行う様にもし又何か特別の目標を以て来館するものに対しては専門の学者実際家があって、夫れ夫れ適当な指導を与え研究を扶け其外特に貸出の目的で陳列資料を準備し各地の展覧会学校其他へ貸出したり又博物館以外の場所に志望者を引率して現地指導を行う等、博物館の積極的活動は多方面に渉り民衆大学、民衆研究所、或は直ちに目と耳に訴える学校以上の学校、卓越せる社会教育機関として広範な機能を有せしめ、以て楽しく且真剣に子供の時より親しみのある施設を有するものでありまして、他の教育機関のよく及ぶ能わざる所のものでなければならぬのであります。外国に於ては其の国々により程度こそ異なれ何れも斯種の施設に力を入れて居るのであります。	学者実際家 楽しく且真剣に子供の時より親しみのある施設

第一稿（史料一）	最終稿（『博物館研究』稿）	備考
我が邦に於きましても近年漸く各地に博物館の建設せらるるものが多くなり小規模のものまで合すると二百六七十を算するようになりました。而して此れ等の内には前に申述べましたような活動的な生きた博物館があちこちに現われるようになりましたことは洵に喜ぶべき現象であります。 然し何れもまだ規模が小さく経費も少ないので十分な活動を見るには至りません。 例えば上野の東京科学博物館の如きも本邦唯一の科学博物館としては余りに小規模であります。然しあの博物館へ行って見ますると日曜日等には親子連れの観覧者が飛行機の運転模型や実験用電気機械等の前に立って熱心にその作用や構造を研究致して居るのを見受けますが、斯様な実物実験の教育によりますれば書物では十時間費しても仲々理解出来ない事柄も僅かに一時間ではっきり理解することが出来て観覧者に非常な満足と利益とを與えることが出来るのであります。	我国に於ましても近年漸く各地に博物館の設置せらるると共に逐次向上の途を辿り、其の数も現今では小規模のものまで合すると其数二百七十を算する様になり、其内には活動的な生きた博物館もあちこちに現われる様になりましたことは洵に喜ぶべき現象であります。 例えば上野の東京科学博物館の如き夫れでありまして同館では日曜日等には親子連れの観覧者が飛行機の運転模型や実験用電気機械等の前に立って熱心に其作用や構造を研究し、係員等も熱心に説明して居るのを見受けます。而して其結果は書物では十時間費しても中々理解出来ない事柄も僅かに一時間で判きり理解することが出来て観覧者に非常な満足と利益とを與えて居るのであります。 然し何れもまだ規模も経費も小さなもので十分に活動を見る迄に至りませんことは残念であります。 之等博物館の整備と共に観覧者に其研究観覧の方法を工夫する様に仕向くることを此際特に附加えて置きます。 以下少しく転じて外国の博物館を観察して見たいと思います。	博物館の整備と共に観覧者に其研究観覧の方法を工夫する様に仕向くることが必要
茲で私は外国の博物館に就て一、二御話して見たいと思います。 第一次世界大戦に於てあれ程に叩きつけられた独逸が今次の大戦に於て世界を震撼する大勝を博しつつある原因には種々ありましょうが之を博物館施設の上より見ても成程とうなずかれる点があるのであります。 即ち博物館の普及せることに於ては独逸は世界第一位で、数年前の調べによりますると、博物館の数が英米カナダその他の諸国に於て人工十万人に対し一館内外の割合であるのに対し、独逸は約二館半即ち他の諸国の二倍半になって居るのであります。夫等博物館は大中の都市には勿論、田舎の小さい町村にまで設立せられて学術の研究指導、民衆の知識向上、殊に郷土に関する認識の改善愛郷土心祖国愛の養成に大に貢献致して居ります。 就中看過することの出来ないのはミュンヘン市にある国立の科学工業博物館であります。この博物館は世界的に有名な最高の模範とすべきもので去明治三十六年これが設立の準備に着手され爾来三十有余年の日子を費して最近完成されたものであります。この博物館の目的は自然科学及び技術上の傑出せる業績を実物に依って展観して国民の科学知識を向上し其科学と技術とを尊重する気風を振作し以て国力を増長に寄與せんとするにあります。	第一は独国でありますが、此国が第一次世界大戦にあれ程に叩きつけられたにも拘らず今次は世界を震撼するほどの大勝を博しつつある原因を探究して見まするに固より独逸人の精神を独逸魂一色に固めた等重要なものが種々ありますが、一度此国の博物館に眼を配りますなら、あの電撃の力の出た源は成程一方に此博物館という蔭の大きな力があったことを首肯かるるのであります。 即ち独逸は世界第一の博物館の普及せる国で数年前の調によりまする博物館の数が英米カナダ其他の諸国が人口十万人に対し一館内外の割合であるのに独逸は実に館数二倍半の割合になって居るのであります。そして夫等博物館は大中の都市は勿論田舎の小さい町　村にまで設立せられて学術の研究指導民衆の知識向上殊に郷土に関する認識の改善、愛郷土心、祖国愛等の養成に重点を注ぎ大なる貢献をして居るのであります。 就中看過することの出来ないのはミュンヘン市にある国立の科学工業博物館であります。此博物館は世界的に有名な且最高の模範とすべきものでありまして明治三十六年設立の準備に着手され、爾来三十有余年の日子を費やし最近完成されたものであります。此博物館の目的は自然科学及技術上の傑出せる業績を実物に依て展観せしめて、国民の科学知識を向上し其科学と技術を尊重する気風を振作し、以て国力の増進に寄與せんとするにありまして独逸の卓越せる機械兵団の背後には実に小国民の時より其所要知識を滋養せられたる此恩人博物館の無	独逸の卓越せる機械兵団の背後には実に小国民の時より其所要知識を滋養せられたる此恩人博物館の無言の

第一稿（史料一）	最終稿（『博物館研究』稿）	備考
偶々建築工事の進行中に世界大戦に遭いましたが、大戦終了後極度の経済難に直面したにも拘らず、斯かる博物館の建設は一時も猶予すべきではないとして朝野挙っての熱意の結果、万難を排して去大正十一年ついに完成を見るに至りました。陳列館、研究館、図書館等合せて実に二万数千坪を有し、これを一巡すれば世界の重要な発明や最近の科学の進歩が容易く理解され全く世界の物質文明の粋を一堂に蒐めた観があります。一ヶ年百二十万マークの経常費と百名の従業員とに依ってこの大学芸機関が運転されているばかりではなくその背後に六百余名の独逸科学工学及び工業界一流の代表的専門家委員があって常に各方面重要問題の相談に応じて援助しつつあることを忘れてはなりません。同博物館が今日全独逸国民科学知識の向上科学技術尊重の一大原動力なって居るばかりでなく実に全世界の模範的科学工業博物館として各国民羨望の的となっているのも偶然ではありません。 独逸は斯うした大博物館ばかりではなく大戦後郷土博物館と称する地方的小博物館の建設を奨励しこの種の博物館は殆んどすべての都市及び町村に存在し一千余の多きを算して居ります。 独逸が斯く郷土博物館に力を入れるようになったのは第一次大戦後政体に変革が行われ個人主義が勢力を得た為の甚だしい苦境に陥いったので教育の方針を一変しその基礎を愛郷土精神の養成社会連帯観念の発達に置いたからであります。即ち郷土の研究に依って地方的特色の保存、独逸文化の開拓その美点の発揮に向って専ら精力を集注し、依って以て民族的に国民を結合し強力な独逸連邦を再建せんと企図するに至ったからであります。 独逸が中央の大科学工業博物館の経営ばかりではなく、斯うした多数の郷土博物館を始め一般博物館施設の奨励に力を用いたため科学知識の普及及向上並に国民精神の滋養に役立ち、延いては今回の大捷に大に貢献したことは私の信じて疑わない処であります。 次は米国でありますが、同国の博物館熱は近年著しいものがありまして新博物館の増加する数は少なくとも二週間毎に一館以上であることが統計によって明かであります。 そして博物館の如き大衆機関に対しては米国民一般が非常な関心を有し特志家は競って莫大な寄附を行うためその規模が大きく設備も甚だ完備し且つ優秀な館員を多数置いて大に積極的活動致して居ります。大きい博物館に於ては一ヶ年の経費週百万円以上にも上り、大学教授級の専門学者を置いて学術上の研究指導及び資料の蒐集を行うは勿論学校生徒や一般	言の活動があったことを忘れることは出来ないのであります。 而も更に記憶すべきことは此博物館は偶々建築工事の進行中に第一次世界大戦に遭い、大戦終了後極度の経済難に直面したにも拘らず一時も猶予すべきでないとして朝野挙って努力し万難を排して漸く最近其完成を見るに至りましたもので其規模は陳列館、研究館、図書館等合せて実に二万数千坪を有しこれを一巡すれば世界の重要な発明や最近の科学の進歩の状況が容易く理解され、世界の物質文明の粋を一堂に蒐めた観がある宏大なものであります。其経費も一ヶ年百二十万マークに達し、百名の従業員が活動し其背後には六百余名の独逸科学工業界第一流の代表的専門家委員があって、常に各方面重要問題の相談に応じて援助しつつあるのであります。此博物館が今日全独逸国民科学知識の向上科学技術尊重の一大原動力になって居る許りでなく、実に全世界の模範的科学工業博物館として各国民羨望の的となって居るのであります。 独逸は斯うした大博物館許りでなく大戦後郷土博物館と称する地方的小博物館の建設を奨励して居りまして、斯種の博物館は殆んど凡ての都市及町村に存在し一千余の多きを算して居ります。 抑も独逸が斯く郷土博物館に力を入れる様になったのは第一次世界大戦後政体に変革が行われ個人主義、共産主義が勢力を得た為め甚だしい苦境に陥ったので教育の方針を一変し其基礎を愛国、愛郷精神の養成、社会連帯観念の発達に置いたからであります。即ち郷土の研究によって地方的特色の保存、独逸文化の開拓、其美点の発揮に向って専ら勢力を集注し依て以て民族的に国民を結合し強力な独逸国を再建せんと企図する様になったからであります。 独逸が中央の大科学工業博物館の経営許りでなく斯うした多数の郷土博物館を始め一般博物館施設の奨励に力を用いた為め、科学知識の普及向上並に国民精神の滋養に成功し物心両方面の併進を得て之が今回の大捷の最大原因と為ったのであります。吾人は現下の我が国情に照らし他山の石大に考察を運らす必要があると存じます。 次は米国でありますが、同国の博物館熱は又近年著しきものがありましてさすがに富福な金力と不屈の意気とを以て必要とすれば直ちに建設に着手し、新博物館の増加する数は少なくとも二週間毎に一館以上であることが統計によって明かであります。 其上篤志家は競って莫大な寄附を行う為め其規模が大きく設備も完備し且優秀なる館員を多数置いて目覚しき活動を致して居ります。経費の如きも大きい博物館になると一ヶ年数百万円以上に上り、大学教授級の専門学者を置いて学術の研究指導及資料の蒐集を行うは勿論学校生徒や一般民衆に対しても特別の館員を置いて頗る有効な教育を行って居ります。其結果一ヶ年に於ける博物館入場者数は全米国民の三分	活動があった 個人主義、共産主義

第一稿（史料一）	最終稿（『博物館研究』稿）	備考
民衆に対しても教育に経験ある館員を置いて頗る有効な教育を行って居ります。その結果一ヶ年に於ける博物館入場者数は全米国民の三分の一に達するのを見ても如何によく博物館が利用されつつあるかが想像されます。 翻って我が邦博物館の現状を見まするとと誠に遺憾千万であると申すより外ありません。先刻も申す通り極めて少数の博物館のみが最近漸く博物館は尚その規模設備が極めて貧弱で然かも博物館従業者として特別に養成された適当な館員のいないため、積極的活動を行うことも出来ず唯座して見物人の来るのを待ち陳列品の番をして居るに過ぎないような全く死んだ博物館が多いように見受けます。	の一に達するを見ても如何によく博物館が利用されつつあるかを想像されるのであります。此他伊太利、英、仏等夫れ夫れ特徴を以て居りますが省略致します。 斯く見まするとと我国の状況は列国の夫れに比すべくもなく古代よりの国民文化を語るべき博物館には世界に比類なきものもありますが、概して一般には今尚三四等国の班を出ていない有様であることは返す返すも残念であります。	
然し学芸教育機関としての博物館の必要は既に一部有識者の間には熱心に唱道せられ我が帝国議会に於きましても第九議会以来屡々完備した国立博物館建設の建議案が可決されて居りますが我が官民が真に博物館の必要を解しその価値を認めないため今日まで博物館施設のみが全く忘れられて遅々として進まず世界の第三、四等国にも及ばぬような極めて情けない状態にあります。 今や我が邦内外の情勢は急変転して国防国家の建設並に新東亜の建設に向って一意邁進しなければなりませぬ。この秋に当って博物館の如き最も大衆的で且つ最も有効な教育学芸の機関の完成充実は実に刻下の一大急務であります。然るに之を閉却して今日の如き不備な状態に放置することは絶対に許されぬことと考える次第であります。 差当り独国ミュンヘンの科学工業博物館如きもの、並に大陸及び南洋の開発研究に必要な自然及び人文に関する資料を蒐めた東亜博物館とでも称すべき綜合的な一大博物館を一日も早く建設致さねばならぬことを痛感するものであります。	考えまするに学校教育が如何に進んでも此社会教育の大欠陥ある以上エヂソン、マルコーニの如き科学者は愚か国家諸施設の活発なる機械化も覚束なく、常に彼らに一籌を輸することとなると思います。 我帝国議会に於きましては夙く第九議会以来屡完備した国立博物館の建設案が可決されて居るのでありますが、今日尚其機運が熟しません吾人は此際上野の科学博物館とミュンヘンの科学工業博物館とを思い比べて独り独逸の電撃戦に驚嘆するに先だち眼を深刻に其内面に注ぎ依て以て来れる原因に思を致すことが肝要と存じます。 今や我国内外の情勢は国防国家の建設並に新東亜の建設に向って一意邁進せねばならぬ此秋に当たって無比の国体、挙国一体の理念に於て到底彼らの及ばざる優秀性に恵まれて居るに拘らず、国力増進の過程に於て稍もすれば一日の長を彼等に譲らんとするの状ある其原因が那邊にあるかを考うる時、彼我博物館の現勢が雄弁に其根源を物語るものあるを痛感するのであります。 今日国家興隆の源泉を尋ね一方其国民精神の昂揚を為すと共に他方其活動の実力培養機関たる博物館振興が並んで必要であることを知りし以上、今更過去戦後の独逸を範とする迄もなく一気に我が大和民族の偉大性を其実行性の上に発揮し先ず現在の博物館運用を活かして当面の急に応じ、次に第一各地各所に手早く郷土博物館を建設して稍もすれば沈滞せんとする世相に之を通じて明るき希望と現在への教示を與え、第二には国家は力を尽くしてミュンヘン科学工業博物館を凌ぐべき一大科学殿堂を速かに建設し、第三には大陸及び南洋の開発研究に必要なる人文及自然に関する資料を蒐めたる東亜博物館とも称すべき綜合的な大博物館と更に之が指導の基礎たるべき我が肇国の精神と我が偉大なる国民文化を示すべき大郷土博物館即ち大日本皇国博物館ともいうべきものの建設を為し、以て国家興隆への実際性を與うることが国家の一大急務と信ずるのであります。	社会教育の大欠陥ある以上エヂソン、マルコーニの如き科学者は愚か国家諸施設の活発なる機械化も覚束なく、常に彼らに一籌を輸することとなる 上野の科学博物館とミュンヘンの科学工業博物館 第一各地各所に手早く郷土博物館を建設して稍もすれば沈滞せんとする世相に之を通じて明るき希望と現在への教示を與え、第二には国家は力を尽くしてミュンヘン科学工業博物館を凌ぐべき一大科学殿堂を速かに建設し、第三には大陸及び南洋の開発研究に必要なる人文及自然に関する資料を蒐めたる東亜博物館とも称すべき綜合的な大博物館 大郷土博物館即ち大日本皇国博物館

一見してわかるように、荒木は第一稿に大幅に修正・加筆をほどこしている（第一稿―約三，六〇〇文字、最終稿―約五，四〇〇文字）。特に冒頭の加筆と結論部分の修正・加筆が著しい。この修正・加筆部分を検討することで、当時の、原案者と荒木との「博物館」についての認識の相違、そして荒木自身の「博物館」観をうかがうことができる。

三、考　察

では「国家の興隆と博物館の重要使命」の原案者は誰か。結論から述べれば、著名な博物館学者であった棚橋源太郎（一八六九～一九六一）と思われる。棚橋は当時日博協の常務理事で、会務の中心的存在であり、また理論的支柱であった。

荒木の回想に、以下の記述がある。

「当時世界は博物館建設に熱中し、就中米独は着々其計画及実施を進めつつあったので、私は昭和十五年九月十八日棚橋翁のすすめにより、博物館に関し全国に放送した。今其一節を摘記することは何かの参考になると思うので下に之れを掲げる。　―中略＜「国家の興隆と博物館の重要使命」からの抜粋＞―　此の放送の基礎数字と其の構想に関しては、棚橋翁に負う所が多かったのであります[21]」

また第一稿の結論部分にある「東亜博物館」についての記述が、本放送直前に棚橋が東亜教育大会で行った講演「新東亜建設と博物館教育」の主旨とほとんど同一である[22]。

さらに図版二に見るとおり、第一稿の原題は「閉却された博物館」であった。第一稿から読み取れる当時の博物館界の現状を憂える一種悲観的、自戒的な調子は、この時期の棚橋ら博物館関係者の論説に再々表れるものとされる[23]。

第一稿の表紙には、荒木による以下のメモがある（図版一）。

「一、美術・文化ノ没落　・西洋的ナラザルベカラズ　・幾度カ企図シテ成ラズ　十年空シク過グ[24]

一、科学と精神
一、社会教育的
一、列国ノ力ノ往キ方
一、積極性」

これらは荒木が修正・加筆の要点として記したものであろう。

このメモを参考とし、前表を比較検討すると、荒木の修正・加筆部分は、棚橋案を基底にその悲観的な調子を弱めつつ、おもに次の三点を増補強調したものと考えられる。

一．国家隆盛のための科学・工業についての知識、教養の必要性
二．科学・工業振興のための、幼少期から生涯を通じて一般が利用可能な、社会教育・生涯教育機関としての博物館の重要性
三．郷土博物館の重要性

このうち前二者は、冒頭から前半部分の修正・加筆の主要部をなす。ここに荒木自身によるあるべき「博物館」観をみることができる。ここでは多くを述べえないが、荒木は文相時代、またそれ以前より、科学振興・科学教育の重要性を説き、かつ学校教育偏重主義を批判していたことがその背景にあろう。

とくに注意されるのは、「幼少の時より大衆的に又自然的に其素養を与える」「子供の時から始まって一角の専門家に至るまで」「子供の時からの親しみを與え所謂三ツ子の心百マデの譬の如く」「楽しく且真剣に子供の時より親しみのある」「小国民の時より其所要知識を滋養せられたる」と、子供と博物館教育との関係について再三再四述べている点である。これらは第一稿にはまったくみられない。

三は、本来棚橋の持論であったが[25]、なぜか第一稿にはドイツの郷土博物館の事例しか現れず、結論では「独国ミュンヘンの科学工業博物館如きもの」および「東亜博物館とでも称すべき綜合的な一大博物館」の建設を訴えるのみである。荒木はこの結論部分を「先ず現在の博物館運用を活かして当面の急に応じ」「次に第一各地各所に手早く郷土博物館を建設し」、第二に「ミュンヘン科学工業博物館を凌ぐべき一大科学殿堂を速かに建設し」、第三に「東亜博物館とでも称すべき綜合的な大博物館」および「大郷土博物館即ち大日本皇国博物館」

を建設すべきとしている。

荒木が地域における郷土博物館の建設を急務とし、さらにおそらく中央における大郷土博物館の建設を謳ったのは、棚橋案の説く「独逸が斯く郷土博物館に力を入れるようになったのは第一次大戦後政体に変革が行われ個人主義が勢力を得た為の甚だしい苦境に陥いったので教育の方針を一変しその基礎を愛郷土精神の養成社会連帯観念の発達に置いたからであります。即ち郷土の研究に依って地方的特色の保存、独逸文化の開拓その美点の発揮に向って専ら精力を集注し、依って以て民族的に国民を結合し強力な独逸連邦を再建せんと企図するに至ったからであります」に、戦時下の皇道派軍人として共感したからであろうか。あるいは棚橋の持論を酌んだのか。

いずれにせよ第一稿（図版三・四）、第二稿（図版六・七）ともに、この結論部分への荒木の修正・加筆は執拗とすらいえ、冒頭部分の加筆と同じく講演への並々ならぬ関心がうかがえる。

四．結　語

以上、荒木と「国家の興隆と博物館の重要使命」について検討した。荒木は、おそらく七月末ころより九月半ばまでのほぼ一ヶ月強の間に、煩をいとわず何度も原稿を推敲し、自身の見解を加えている。よって荒木は少なくとも日博協会長就任直後、博物館について関心を有したことは疑いない。

すなわち、それ以前の関心や知識の多寡は不明だが、日博協会長就任を契機として、荒木は博物館に積極的な関心を持ちはじめたと考えたい。

事実これ以降荒木は、日博協会長としてさまざまな活動を行っていることが知れる。日博協への影響をはじめ、日本の博物館史上、看過しえないものがある。今後の研究課題としたい。

註

1　伊藤隆校訂解説　一九九一　「荒木貞夫日記（未公開史料）」　文藝春秋　一〇六巻三号　二五二―二五四頁、橘川学　一九八七　『荒木将軍の実像：その哲と情に学ぶ』　泰流社、国史大辞典編集委員会編　一九七九　『国史大辞典：第一巻』　吉川弘文館　三三一―三三二頁、橘川学　一九五五　『嵐と闘ふ哲将荒木』　荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会、橘川学　一九五四　『秘録陸軍裏面史：将軍荒木の七十年　上巻』　大和書房

2　倉田公裕監修　一九九六　『博物館学事典』　東京堂出版　二一七―二一八頁、梅谷蓼花　一九四三　「日本博物館協会：過去十五年間の足跡」　博物館研究　十六巻十号　九―十四頁

3　山脇春樹　一九四〇　「荒木会長を迎ふ」　博物館研究　十三巻七号　二頁、同上　日本博物館協会　「本会記事」　七頁

4　橘川学　一九八七　『荒木将軍の実像：その哲と情に学ぶ』　泰流社　二四三頁

5　橘川学　一九五四　『秘録陸軍裏面史：将軍荒木の七十年　上巻』　大和書房　一八九頁　このベルンの平和博物館について現在の詳細は不明。

6　荒木貞夫　一九六一　「博物館事業と棚橋源太郎翁」　博物館研究　三四巻五号　二頁

7　註5前掲書　二〇七頁

8　註3前掲書　二頁、註6前掲書　三頁、有竹修二編　一九七五　『荒木貞夫風雲三十年』　芙蓉書房　二三一頁　これらに言及されている博物館建設案は、日博協会長就任後に荒木が関わった「大東亜博物館」建設案とは異なるように記されている。

9　国立科学博物館編　一九七七　『国立科学博物館百年史』　国立科学博物館　三四一―三四二頁

10　日本科学史学会編　一九七〇　『日本科学技術史大系：第四巻』　第一法規出版　三二七―三二八頁

11　註10前掲書　三三二―三三五頁

12　金子淳　二〇〇一　『博物館の政治学』　青弓社　九一―九七頁

13　日本博物館協会　一九四〇　「本会記事」　博物館研究　十三巻十号　七頁

14　日本博物館協会　一九四〇　「本会記事」　博物館研究　十三巻八号　七頁

15　註13前掲書　二―四頁

16　『博物館研究』十三巻十一号の「本会記事」は理事会にて「森理事より荒木会長放送講演の別刷に関し夫々報告があった」とし、また同誌十四巻三号の「本会記事」に「謹呈　昨年九月十八日、荒木本会長東京中央放送局より全国へ放送せられた〈国家の興隆と博物館の重要使命〉と題する講演の印刷物の余部が、まだ多少残って居りますから、有志の方々へ贈呈したいと存じます―後略」とある。

17　東京大学法学部附属法政史料センター原資料部編　一九九四　『近代立法過程研究会収集文書No.82：荒木貞夫関係文書目録』　東京大学法学部附属法政史料センター原資料部まえがき

18　ただし、お茶の水女子大学附属図書館が所蔵する「国家の興隆と博物館の重要使命」は、一一

書誌情報に八頁：23㎝とあり、史料三とは異なる可能性がある。

19　たとえば註17前掲書にみえる「99－1　高等師範学校長、高等学校長、実業専門学校長懇親会席上大臣講演案」や「100－6　軍需工業関係者招待席上に於ける陸軍大臣挨拶案」、「101－8　功績審査委員ニ対スル大臣ノ訓示：陸軍大臣荒木貞夫」などがそうであろう。

20　荒木によって一部改変されている。

21　註6前掲書　三頁

22　棚橋源太郎　一九四〇「新東亜教育と博物館教育」博物館研究　十三巻八号　六頁

23　註12前掲書　一三三―一三五頁

24　ここで荒木が記した「幾度カ企図シテ成ラズ　十年空シク過グ」とは、最終稿の「私共は同憂の士と共に昭和の初より此点に微力を致し博物館特に科学大殿堂の建設を叫び来ったのでありますが、早くも十五年は空しく過ぎ唯不急の事業なりとせられて一日一日を空しく経過し今日此事態に直面致しましたことは返す返すも遺憾に思うのであります」に繋がるものであろうが、この「私共」以下は日博協の案をさすのか、あるいは註8でふれた荒木独自の博物館建設案をさすのか判然としない。

25　棚橋源太郎　一九三一『郷土博物館』刀江書院、棚橋源太郎　一九四一「郷土博物館の諸問題」博物館研究　十四巻十二号、日本博物館協会編　一九四二『郷土博物館建設に関する調査』日本博物館協会　などを参照。

※「時局と博物館」表紙の荒木によるメモの読み下しは、本学美術史・文化財保存修復学科助教授、長坂一郎氏のご教示をえた。

執筆者
後々田寿徳
学芸員課程　専任講師

図版一一

図版一

図版一一四　清水高志文書「明治二十年神奈川県と神奈川県の書類交換（国会の議決と神奈川県の書類交換命令）」　国立国会図書館憲政資料室蔵

図版四

図版三

図版八

図版五

図版五～八　清水高文書「国家の機関と博物館の事業保存令」　国立国会図書館憲政資料室蔵

図版十

Sadao Araki and "A museum mission for the prosperity of the nation"

GOGOTA Hisanori

"A museum mission for the prosperity of the nation" that is assumed to be a transcript of a radio address on September 18, 1940 by Sadao Araki (1877-1966).

Araki was a famous military and a politician through the Taisho and early Showa period. He served as the chairman of the Japanese Association of Museums from June 1940 until around after the World War II.

"The museum mission for the prosperity of the nation" was Araki's first official act of duty to the public. Araki's lecture might be based on a draft by Gentaro Tanahashi (1869-1961), a museologist in the Japanese Association of Museums.

Araki modified and emphasized this draft for his lecture from his own perspective on the museum in the following three points;

1. Necessity for knowledge and understanding of science and industry for the prosperity of the nation
2. Importance of the museum available to the public throughout life as social education facilities for promotion of science and industry
3. Importance of a museum of different localities

Araki actively engaged in the Japanese Association of Museums after "A museum mission for the prosperity of the nation".